

Juichi WAKISAKA Race Report

2012 AUTOBACS SUPER GT -Round 1 OKAYAMA GT 300KM RACE-

◆◆ 次につながる戦いを展開 ◆◆

No. 39 DENSO KOBELCO SC430		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 石浦宏明	12位	9位

開催日：2012年3月31日-2012年4月1日

サーキット：岡山国際サーキット（岡山県美作市、コース全長：3.703km）

レース距離：82周（303.646km）

入場者数：予選日8,100名、決勝日：16,000名 合計：24,100名

昨シーズンの富士スプリントカップからおよそ4ヶ月。ついに2012年のシーズンが始まった。オフにチーム移籍を果たした脇阪は、心機一転、No.39 DENSO KOBELCO SC430をドライブすることになる。コンビを組むのは、石浦宏明選手。そしてSC430の足元を固めるのは、ミシュランタイヤ。新たな布陣で挑む今シーズン、さらに躍動感ある戦いが期待できる。



■ 3月31日(土)

09:00-11:00 公式練習

14:30-16:05 ノックアウト予選

【公式練習】 2位 / 1'34.373

レースウィークに入った岡山は天気が優れず、朝から本降りの雨に。午前9時にスタートした2時間の公式練習の頃には雨量が落ち着き、ヘビーウェットの状態ではなかったが、それでも足元をくわれてコースアウトする車両が続き、幾度となく赤旗中断に見舞われた。

No.39 DENSO KOBELCO SC430は先に石浦選手がコースに向かい、周回を開始。ウェットにおけるミシュランタイヤならではのパフォーマンスを引き出し、暫定トップタイムとなる1'34.373をマークした。その後、3度目の赤旗を経て走行が再開してしばらく経った午前10時半ごろ、脇阪がこの日初めてコースイン。2週間前の岡山を経てセッティングを変更していることから、脇阪はまずクルマのフィーリング確認のため、周回を重ねた。

時間の経過とともに雨も上がり、日差しも出始め、コース上はメインストレートこそ少しばかり水しぶきが上がるものの、場所によってはセミウェット状態まで回復。このタイミングで1号車のGT-Rがベストタイムを更新してトップへと躍り出たため、No.39 DENSO KOBELCO SC430は僅差ながら2番手で公式練習を終えている。



【公式予選】 12位 / 1'32.624

今回、岡山戦の予選で採用されたのは、Q1-Q2-Q3と駒を進めるノックアウト方式。この方式は昨年も実施しているが、今シーズンはその中身が一部改正され、各セッションでひとりのドライバーがアタックを担当し、さらに、連続してセッションを出走できないことになった。つまり、Q3まで残った場合、交互にアタックを担当することになるというものだ。

今回、脇阪はQ2を担当するため、まずQ1担当の石浦選手のアタックを見守った。午後2時半、GT300のQ1がスタートした頃には雨は降っておらず、ただ灰色の雲が一面に張り出していただけだったが、セッション終了間際になって、にわかに風が強まり、一気に雨が落ちてきた。そこで石浦選手はレインタイヤを装着してコースイン、アタックに向かった。

15分のセッションは、残り時間5分にして1台の車両がコース上にストップし、赤旗中断に。この時点でNo.39 DENSO KOBELCO SC430は暫定6番手につけていたのだが、アタック再開後にタイムアップを果たしたチームに対し、やや遅いタイミングでコースインしたことが裏目に出、存分なアタックができず、タイムアップのチャンスを喪失。結果、1'32.624のタイムは12番手どまりとなり、Q2進出の機会が潰えた。

開幕戦を12位からスタートすることになったNo.39 DENSO KOBELCO SC430だが、脇阪は予選日を振り返り、「ウェットコンディションでのパフォーマンスが良かったこと、そして決勝の展開を考慮し、Q1でslickタイヤを装着する予定はありませんでした。ただ、赤旗を挟み、再度コースインするときに、タイヤ選択に多少の迷いが生じました。加えて、コース上ではタイミング悪くトラフィックに引っかかってしまうなど、色々な要素がうまく作動しませんでした」とコメント。また、今後に向けて、「クルマのセットアップをはじめ、まだまだやりたいこと、やるべきことがあります。改善の余地があるので、与えられた時間の中でやることをやって、方向性を見つけていきたいと思います」と抱負を述べた。



■ 4月1日(日)

08:20-09:05 フリー走行 (09:15-09:30 サーキットサファリ)
14:00- 決勝 (8周)

【フリー走行】 13位 / 1'25.349

迎えた決勝日。雨は上がったが、一気に季節は冬へと逆戻り。午前8時20分からのフリー走行は、気温6度、路面温度8度という季節外れの寒さが先行する環境の中で行われた。

落ち着かないコンディションということもあり、その中で多くのシミュレーションに取り組んだチームでは、セットアップの再確認などをを行い、計測タイムは1'25.349のタイムをマーク。13番手に値するものだったが、このセッションではタイムよりもまずは午後の決勝に向けて丹念に準備を進めることが大事とばかり、その後、交代した脇阪もコンスタントラップを刻みながら、淡々と必要事項の消化に取り組んだ。

その後、コース上ではSUPER GT恒例のサーキットサファリを実施。脇阪はこの時間帯を使って引き続き走行を担当したが、コース上を周回していた大型バスが退去したあとには、非公式ながら総合4番手となる好タイムをマーク。チームとして決勝に向けての足がかりをつかんだ。



【決勝】9位 / 2ポイント獲得（シリーズポイント：2ポイント、シリーズランキング：9位）

午後に入り、時折顔を出す日差しによってやや寒さは軽減されたが、厚い雲が幅を利かせると、あっという間に雨が降ってもおかしくないような天候の中、午後2時に2012年の初戦がスタート。今回は300km、82周にわたる戦いとなる。

No.39 DENSO KOBELCO SC430は石浦選手がスタートを担当。オープニングラップでひとつポジションを上げ、11位からの追い上げを開始した。気温10度、路面温度15度と依然として冬のコンディションでの戦いとなったが、その中で石浦選手はコンスタントな速さをキープ、逆転のチャンスを伺った。しかし、テクニカルコース、しかもGT300との混走になると大混乱を引き起こす可能性が高いサーキットゆえに、なかなか思うような戦いに持ち込むことができない。まずはミスなく周回を重ねる走りに徹することになった。

ピットインのタイミングはライバル達の少しあとになる39周終了時。レース折り返し目前でドライバー交代を行い、脇阪がコースへと向かった。タイヤに熱が入り、スピードアップしてきた43周目にはチームベストタイムとなる1'25.419をマーク。8位へとポジションアップし、このまま今季初レースを8位入賞という形で締めくくるかに思われたのだが…。後ろにつけていた18号車のHSV-010の猛攻に遭い、逆転を許すことなく終盤になり、タイヤ特性の違いによるパフォーマンスの違いが出てしまったようだ。とはいえ、脇阪は最後の最後まで攻めの姿勢でレースを完遂。チーム移籍後の初レースを9位で終え、チームに入賞ポイントをもたらした。



レースを終えた脇阪は、「もともと岡山のコースはミシュランタイヤにとって特性が合いにくいようで、厳しい展開になることは予測されていました。しかしながら、シーズンオフの間に繰り返されたテストによって、ポテンシャルが改善されたこともわかりました。そういう点を踏まえると、現状に見合った戦いはしっかりできたと思います。石浦選手も自身のステント後半で厳しいコンディション

の中、しっかりとガンバってくれました。ふたりとも、今シーズン初レースでなんとかポイントを獲りたいという思いが前面に出て、その強い意志が今回の入賞につながったのだと思います」とタフな戦いを振り返った。一方、チームとしての今後については、「まだまだやれることがたくさんあると感じました。レベルの高い話ができるので、第2戦富士に向けてのテストもしっかりとこなし、走りこんで次に備えたいと思います」とこれからの飛躍を誓った。

次戦は、ゴールデンウィークの5月3日(木)・4(金)に富士スピードウェイ(静岡県御殿場市)で開催される。

【Photo Gallery】

